

「ヒトとモノ」から「ヒトとヒト」へ

阿部 志郎

私の町の子どもたちが、隣町の塾から帰ってくるのは、夜九時半のバス。母親が夕食を塾に差し入れにいく姿をみかける。

ある学校の報告によると、小学高学年生が、塾やけいごごとに通っている回数は、一週平均五・七回という。学校に行くのと同じ回数ではないか。

子ども同志が、手帖を出してスケジュール調整している場面にぶつかってドキッとさせられたことがある。

子どもたちは忙しい——。親にふりまわされているのか、逆に親が子どもにふりまわされているのか。いや、親も子ども社会にふりまわされていると言うのが正

確であろうか。

要するに、いまの子どもは、「遊び」を楽しむ環境に恵まれていない。

①遊ぶ時間がない、②遊ぶ場所がない、③遊ぶ友達がいない、④遊び方をしらない、が子どもの問題として指摘できる。

勿論、子どもだから全く遊ばないわけではない。それでは、なにをして遊んでいるのか。

漫画にテレビにファミコンの三つに代表される。

この遊びに二つの共通点がある。

一つは、テレビというモノと子どもの関係が、子どもの世界を占めているといわなければならない。

「モノ」と「ヒト」の関係を、いかに「ヒト」と「ヒト」の世界に取り戻すかが教育課題として登場してくる。ヒトとヒトのふれあいが重視される背景が、ここにある。

もう一つの特徴は、ひとりだけで遊べることにほかならない。

友達や家族がいると煩わしい。友達が新しいソフトをもっているから、遊びに行く。

大都市の教育委員会は、友人が二人以下の小学生が二七%との調査を発表している。すなわち、こどもは、「個室化」とか「孤立化」とよばれる現象に直面しているといえよう。

このような「社会」の状況から、どうやって、こどもを解放できるかが問われるのである。

言うまでもなく、抜本的には、教育システムの問題であり、生産性を基盤とする産業社会が要求する力と富と効率の人間像を変えない限り、こどもに幸せが訪

れることはない。

それは社会体制にかかわることなので、ここで論じてはじまらない。

しかし、幼児は、小学生の予備軍であり、幼児を待ちうけている環境を考えると、身近なところで最善を盡す努力を払うことが大事なのではなからうか。

それには、ヒトとヒトの出会い機会をふやすこと。「ヒト」は、できるだけ老人や障害児をふくめ多様にとらえること。そして、「遊び」を大切にすること、を強調したい。

幼稚園、保育所が、遊びを通して社会性を広くし、こどもが多様な人間関係を体験し、可能性の芽を伸ばし、個性を育てる貴重な場であることを理解したいものだと思う。

保育施設だけでなく、家庭も地域社会も、幼児の人間性を高め、社会関係を豊かにする創造的営みに協働してほしいと願ってやまない。

(横須賀基督教会社会館)